

「今日の説教」 2012年3月18日 明治学院教会(267)

(このプリントは毎週作っているものです。)

「ピラトとは誰か」

牧師 岩井健作

聖書 ヨハネによる福音書 18章28節—40

1、「黒のアント(対義語アントニムの略)は、白。けれども白のアントは赤。赤のアントは、黒……」。太宰治はアントを探すことでそのものの実体をつかもうとしました。罪と祈り、罪と悔い、罪と告白、罪と……嗚呼、みなシノニムだ、罪の対語は何だ(『人間失格』)と言って苦しみました。

さて、私たちが教会に通い、また聖書を読み、祈りをささげ、讃美歌を歌い、人々と交わりを持ち、奉仕をし、社会活動に参加するのは何のためでしょうか。その問いを突き詰めてゆくと「神」を知ることでよい人生を掴むことだと言えます。その「神」は人間の観念に抱き込まれた神ではなく、自分の人生の伴侶として共にいまし、「私」の事をほんとうに知っている「神」を求めています。そうして、聖書は「神」を知ることはイエスを知り、イエスに倣い、イエスに従うことだと教えます。では「イエスとは誰か」。この問いは、信徒も求道者も牧師も、「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向け」(フィリピ3:13)る課題です。そういう意味では「イエスの対義語」が見つければ、イエスの実体を知る手掛かりになります。

2、「ポンテオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証をなされたイエス・キリスト」(テモテへの手紙一6:13)という表現があります。使徒信条にも「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」という文言があります。ポンテオ・ピラトは聖書ではイエスの対義語のような気がします。「ピラトとは誰か」を知ることで、イエスとの出会いを深くしたいと存じます。

3、さて、今日はヨハネ18章、19章のピラトが登場する箇所の一部を読んでいただきました。ここには「ピラトが・・」と17回も出てきます。(共観福音書の該当箇所、マタイ7回、マルコ7回、ルカ10回)。ヨハネが断然多いのです。イエスを殺した力はユダヤ教の権力者たち、最高法院(祭司長、律法学者、支配者による構成)です。しかし、ユダヤはローマ帝国の支配下にあり、死刑の権限がありません。死刑執行権を行使したのはピラト(ローマのユダヤ総督26-36年)です。ユダヤ人の王(メシヤ)の僭称はユダヤでは死罪に当たります。しかしこれはユダヤ人の宗教問題です。ユダヤ人はピラトの官邸に入りません。逾越の食事(ユダヤのもっと重要な祭り)の時、ローマ人であるピラトの官邸に入ると汚れるからです(28節)。ピラトの方が官邸を出たり入ったりします(29、33、38、19:4、9、13)。植民地権力者が、現地民族を権力(武力)だけでは抑え込めない矛盾が出ています。イエスの無罪(ローマ法では)を認めながら、ピラトはユダヤ人の要求に屈します(マルコ15:15他)。皇帝の権威を使うユダヤ人の狡猾さがあります(ヨハネ19:12)。「一人の囚人を過ぎ越しに許す慣習」も行使できずに、強盗バラバを釈放させられてしまい、イエスを十字架刑に処してしまいます。優柔不断な男ピラトが浮き彫りにされます。

4、ヨハネのテーマは「真理について証をするために生まれた」イエスを明らかにすることでした。ピラトはイエスに「真理とは何か」(38節)という有名な問いを發します。この問いを持ちつつ、力に屈し、保身を保ち、不決断のまま、イエスの処刑の責任を負ってしまったのです。

5、イエス(真理、神)に関しては、従うか否かの決断が問題であって、いわゆる中立はないのです。「ピラトとは誰か」。それは不決断のゆえにイエスを殺した人間のことです。もしかするとピラトとは私であって、私がイエスを殺し続けているかもしれません。イエスは「真理について証をする。」「真理に属する人は皆、私の声を聞く」(17:37)と述べます。イエスのアントニムは「私」であるかも知れません。イエスの声を「聞きつつ」、ペトロのように躓きながらも、自分の人生を決断で繋いでゆく歩みをする人間でありたいと思います。